

ことばの実相

田 中 泰 賢

古の人の踏みけん古道は

荒れにけるかも行く人なしに。(良寛)

英語のフリーダムという言葉はもともと否定的な意味を含んでいる。なんらかの制限を予想する。即ち2つのものの対立があって、1つのものが消えて、対立のない状態になると他のものが自由になるとする。だからフリーダムという概念は対立する何ものかがあることを予想する。英語の考え方は——もともとそれはインド・ヨーロッパ語のすべてに通ずる特徴であるが——もともと2元的であって、主語があり、述語があり1つは他なしでは成り立たない。と鈴木大拙氏は述べているが、さて、それでは日本語はどうであろうか。例えば桃水和尚(お寺を出て、癲病^{てんびょう}患者を看病したりした)の「如是の生涯何如^{ごと}広し」、或いは沢木興道和尚の「自分が自分で自分を自分する」或いは道元禅師の「不思議底を思量する」や「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて涼しかりける」を見聞すると、そこには動詞も名詞も見られないし、自他の対立は存在しない。主観と客観によって表層的に分析する主語と述語の対立も無い。主観と客観を超越した深層構造に達している。そこで再び鈴木大拙氏のことばに耳を傾けてみよう。英語のフリーダムの背後にはいつも力という考えがある。この限りに於いて、英語において理解せらるる自由は自由でない。しかしこの自由はもともと仏教から由来している。東洋の自由はアートマン(自我)の性質を特色づけるのに用いる。自由とは、「自分自身である」ことであり、「自己以外の何ものにも依存せぬ」ことである。そこには少しの否定的な意味もない。それは積極的に肯定的な用語である。だから「自由」という言葉はさとの性質をフリーダムよりもっとよく表現している。さとは絶対の知識であり、なにものにも制約されざるものである。私達は「自由」ということば1つをとっても、そのことばの裏には西洋と東洋の違いが厳然と存在する。日本語というものを主語と述語に区別するのは果してどうであろうか。道元の「正法眼蔵」の有時の巻より少し引用してみますと、「帰省禅師はある時、僧たちに示していった。『あるときは心が到ってことばが到らない。あるときはことばが到って心が到らない。あるときは心もことばも、ともに到らない』心もことばも、ともに有時である。到るの到らないのも、ともに有時である。到る時が来ていなくても、到らない時はすでに来ているのである。そうであるとなれば心は去ることのないものであり、ことばはすでに到来しているものである。すでに到来しているものは心であり、ことばはすでに到来しているものである。すでに到来しているものは心であり、去ることのないものはことばである。到るときはよそから来るのではなく、到らないときはまだ来ていないのではない。……心とことばが半ば到るのも有時であり、心とことばが半ば到らないのも有時である、ところはところを覆い尽くし、ところのほかのなにものでもない。ことばはことばを覆い尽くし、ことばのほかの何ものでもない。覆い尽くすことが覆い尽くすことを覆い尽

くす。「われが出て人に会う」という時、我が人に会い、人が人に会い、我が我に会い、出ること：が出ることに会うことと同じである。」ここには他者と我者の2元的、見えるものと見えないものの区別、主と客との入り込む余地は全くない。青山が歩み、石女が子を産む、山は流れるの心境である。次元が違うのである。決して静寂ではない。動きがある。生き生きとしている。良寛の、「ぬす人に取り残されし窓の月」は、彼の深い人間の愛を感じさせ、「銀鉢に明日の米あり夕涼み」の句を觀ても、現代の吾々の生き方を反省させる。物的ことばが多すぎる為か混乱している現代は又特に流行が我々を支配し、生きる上に不自由を生じてくる。彼の自由を極めた態度は主観と客観のことばから自分を解放したものではないでしょうか。日常生活に感じられる目的論的觀念やことばや論理の囚人となることから彼は一切超越しているのです。日常生活の事実を素直に取り、具体的に指し示し、自己体験し、つくりものにおちいることなく、純粹的知と行動を導く自由が結合する時、転回が生じ、論理と直観を超越して、古い組織的型を突き破り、そこから創造が生まれる。幻想から相對へ、そして究極の内成実、絶対的なものに、即ち空を生み出していく。しかし、それは同語反復を根元的なものとする。同語反復から詩が発見されていくのである。今の単語と文法の構造による形式論理の問題点ははっきり言えば、砂上の城である。ハイデッガーは「主観客観の対立は意識の志向性を解せざることによる。」と言う。どうしても岩の如く不動な基底又は深層構造が必要である。和辻氏は「志向性は人の間柄に属する。」と言う。それを提供出来るのは日本語の大きな役目とするところである。超越性それ自体にかかわる時に、沈黙が問題になり、超越性を促えようとするものが、ことばを重視する。不可得底をめざめさせるのが日本語の重大な任務であろう。

散 歩

S. U.

今から書いてみようとしていることは、多分誰もがよく感じていることで、それは、いつも目にし耳にしている散歩道の色々を、今日また秋風に吹かれるまま歩きながら、時には立ち止まって、眺めてみようかといった様なことである。

散歩道いやなやつみてかくれば、

木かげの2人にキッとにらまれ

「秋は、夕暮れ……」と、大そう美しく秋を言い表わそうとした人が、その昔居たそうだが、なかなかどうして、現代のこの秋を言い表わそうものなら、まあ1冊の本にして、かなりのページ数を要するのではなからうか。広大言語の最終〆切日は10月29日になった。後9日は秋祭りである。田舎の人なら、「お祭り」と言えば、農村の秋の風情全てが表現されていると感ずるかもしれない。明け方る時過ぎ、ひざの上にかけられた毛布の表面は、露でしっとりとなれ、空の星は薄曇にかすみながらも、そばで可愛い顔していびきをかきながら寝ている妹に、フエの音、タイコの音に合わせてあの青白いウインクを投げ下していた。かなり昔の想い出である。この秋祭りイグの大人も子供も一緒になっての夜ふかし、こたえられぬ楽しみであった。こんな秋祭りの経験は、今の町で育っ